

<エントリーシート> ※ 事務局記入欄 No. : C-31	部門 校内研修部門	学校名・氏名 八幡市立美濃山小学校・藤原由香里
	活動名 授業研究システムの開発 活動試行・模擬授業 WS・追体験	

課題の設定：

本校には、研究授業に向けて学年や低中高学年のブロックで連携し、協働的に授業開発を行う風土がある。研究授業の際には、複数回に渡って事前事後の検討を行い、実践を練り上げる授業研究を行ってきた。しかし、事前に検討を重ねても、実際の授業でうまくいかないことが多く、大きな変更が必要となることが度々あった。その原因としては、教師目線の発想で授業を考えがちであるため、思い描くように授業が展開しづらいこと、打ち合わせが言葉のやりとりにより頼りがちであるため、メンバーそれぞれの抱くイメージが食い違ってしまふこと等が考えられた。

そこで、重点研究推進部のメンバーを中心として、授業研究システムの開発・校内研修改革に取り組むこととした。具体化にあたっては、校内研修の講師として招聘した東京学芸大学教職大学院・准教授渡辺貴裕氏による提案「教師の学習者としての感覚を活かすこと」「児童と教員の学び方の同型性を意識すること」という2点を踏まえながら実施することとした。

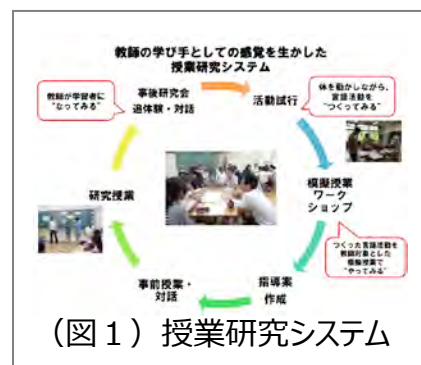
方針・計画：

平成 29・30 年度の本校の重点研究テーマは「表現活動を取り入れた主体的・対話的な授業の創造—表現しながら理解を深める学習者を育てる—」である。主に、演劇的手法を活かした授業改善に取り組むことになっていた。演劇的手法とは、上演を目的とせず「誰か・何かに“なってみる”」「状況や立場に身を置いてみる」ことを通して思考を深める学習方法の一つである。研究主題は、主に授業の中で演劇的手法を効果的に取り入れることで、児童が学習への理解や自己理解、他者理解を深めることを目指すものであった。そこで、授業づくりの過程で児童と教師の学びの「同型性」を保ち、児童の学び方を教師自身も実際に試してみる、つまり、学習者の立場に「なってみる」という演劇的な体験を取り入れることとした。年間3回の校内での公開授業と、1年に1回実施する研究発表会での公開授業に向けた授業研究において、「学習者になってみる」という活動を取り入れることを計画した。

活動内容：

授業研究のシステムとして、次の3つの場面において、教師が学習者の立場に「なってみる」という活動を取り入れた。

- (1) 「活動試行」・・・授業構想の段階で、実際に身体を動かして場面を作ってみたり、演劇的手法を使ってみたりしながら、教材研究をし、言語活動を創造していくこと。
- (2) 「模擬授業ワークショップ (WS)」・・・教職員を対象として、実際に授業を実施してみ、学習者としての実感を出し合い、より学びが深まるよう、活動を練り直していくこと。
- (3) 「追体験」・・・研究授業後の事後研で、授業で児童が行っていた言語活動を実際に体験してみ、そこでの実感を振り返り授業の意味を語り直していくこと。



この3つを授業研究システムとして図に表すと(図1)のようになる。このシステムにそって、教師が学習者の立場になって感じた感覚を振り返りしながら授業研究を行うこととした。

特に意識した点は、指導案の作成を、模擬授業ワークショップ後に行う、という点である。先に指導案を作成し文書にしてしまうことで、教師自身の思考が固まってしまうがちなこと、体を動かす前に文字にすると、実際に授業した時のずれが大きくなってしまふことを回避するため、模擬授業後に位置付けることにした。

模擬授業ワークショップには、次のようなポイントがある。

- ・授業の細部は決まっていなくてもよいので、体を動かして、実際に教師役と児童役に分かれて授業を行ってみる。
- ・授業の中で、「今の方法だと、意見が出しにくいので、こうしたらどうか」というように、学習者としての実感を出

し合い、その場で別の方法を積極的に試してみるという方法をとる。こうすることで、教師の学習者としての感覚を活かしながらクリエイティブな発想で授業を組み立てることができるようになった。その後、指導案を作成し、研究授業を実施し、事後研究会を行う。ここでは、授業者と授業学年による簡単な感想や説明の後、研究授業を再現し、参加者は児童役としてその日の授業での児童の活動を「追体験」する。追体験は、次のようなステップで進めた。



(写真 1) 授業研究の様子

- (1) 授業者がその日の中心となる活動を再現し、参加者は児童役として、実際に活動を行う。
- (2) その後、学習者になってみての実感を語り合う。
- (3) さらに、追体験をした実感を踏まえて、今日の授業について語り合う。

追体験をすることで、参観していただけでは感じられないこと、見えなかったものが見えるようになる。授業の良し悪しを語るのではなく、自分自身の学習者としての実感を感じることができるようになった。そのことにより、授業についての再発見があったり、自分自身の「とらわれ」や「授業観」に気付いたりするような対話が生まれるようになった。

活動の成果：

- 成果は、大きく次の3点である。
- (1) 教職員の授業・児童・教材への理解の深まり
 - (2) 教職員のよりよい関係性の構築
 - (3) 教職員の学習者としての感覚を活かした創造的な授業実践事例の蓄積と発信

平成 29 年 12 月に、全教職員対象とした研究についてのアンケートを実施した。その中で「授業を考える段階、または見た後に教師自身も学習者の立場に“なってみる”活動を追体験する体験は、授業づくりや児童理解、教材研究への助けになった」という設問に対し、「1 とてもそう思う」と回答した割合が79%、「2 少しそう思う」と回答した割合が18%と、多くの教職員にとって、学習者の立場に“なってみる”ことが肯定的に受け止められていることがわかった(グラフ1)。



他にも、自由記述項目やインタビュー調査の結果、次のような回答が寄せられた。
 ・これまでの事後研究会では、経験があまりないので、授業について意見が言いにくかったが、現在のように児童役になって追体験した実感を語る形だと、自分の感覚で意見が言えるので、話しやすくなり、事後研への参加が楽しくなった。職員との仲もよくなった。(20代教諭)
 ・教員ではないので、授業づくりに口を出すことがためらわれたが、今の方法だと、自分の感じたことを話せるので参加しやすい。(60代学校図書館司書)

研修全体を通しては、「一人で抱え込まず、たくさんの教師の感覚や声を吸い上げて協働的に指導案を作成できる」「前もって模擬授業を体験しているので児童の学びの様子を観察しやすく、授業者のねらいもよくわかる」といった意見が得られた。さらに、実践事例が多数生まれ、それらが他校の教員によって実際に活用されていることも、成果としてあげられるだろう。

アピールポイント (アイデアや工夫)：

- ・教職員が自ら演劇的手法を体験しながら授業改善を楽しむ様子に感銘を受け、他校・他府県からも視察に訪れる参観者が絶えない。
- ・外部からの参観者や演劇的手法を活用している実践者が日常の校内研修に参加することで、研修がより刺激的で活気に満ちたものとなっている。
- ・教師が学習者になってみる体験は新たな授業事例を創造する好循環となり、豊かな実践事例が蓄積され、学校ホームページでの発信によって他校の教員にも活用されている。